

# 禪の哲學（第三部）

大井 際 斷

## 第三部 禪のナチュラリズム

### I 自然法爾

禪の哲學體系として、吾々はさきに、第一部 禪のヒューマニズムとして、人間と自己自身との關係を、第二部 禪のソーシャリズムとして、人間と他の人々との關係を、それぞれ確立してきたのであるが、ここにその終篇として、人間と自然との關係を、禪のチナユラリズムとして明確にすることによつて、禪の體系を一應完結しなければならぬ。

アリストテレスが「人間は本來社會的動物である」<sup>(1)</sup> というように、人間は本性上、他者に對する存在であるといえるが、その他者との關係を、ラッセルは、「人間というものは、本來何物かと鬭争するものである」<sup>(2)</sup> と規定しているが、彼のいうように、「自然との戰は、物質科學と技術とによつて行われ、人間と人間との戰は政策と戰争でなされる。個人の魂の内部で行われる戰は、今日までは、宗教で取扱われていた。」<sup>(3)</sup> とするならば、吾々は、此の三つの戰の中の二つを、禪哲學の二部に於て解決してきたのであるが、此の第三部に於て、も一つの戰即ち「自然との戰」に、何らかの終結を與えなければならぬ。そして此の最後の戰の和解こそ、他の二つに勝るとも劣らぬ重大性をはらんでいる。ラッ

セルが、「これら三種の戦の中で、物質的自然との戦は或る意味においては最も根本的なものである。」<sup>(4)</sup>という所以である。

遂に人工衛星、人工惑星の飛ぶ今日に於て、最も緊急な世界的課題は、原子戦争の防止と世界平和の實現にかかつているといつて過言ではない。ラッセルも「原子時代に住みて」というラジオ放送の劈頭に、「現代の社會を廣く蔽つてゐる気分は、どうすることもできない困惑の感じである。吾々は誰もが欲しない戦争の方向に自分たちが押し流されてゐることを感じてゐる。吾々は蛇に狙われた鬼のように、それを避ける方法を知らないので、ただその危険のせまつてくるのをじつと眺めてゐるだけである。吾々はよりあつて、原子爆弾、水素爆弾、都市の全滅、ロシアの難民、飢饉、虐殺などという怖しい話を語つてゐる。」<sup>(5)</sup>と聲を大きくして訴えてゐるように、科學の驚異的進歩に比して、人間の倫理の退化の矛盾をいかに調和させるかの問題、即ち一般的に云つて、科學とヒューマニズムの問題こそ、いつの時代に於ても常に苦しめられて來た古くして而も新しい難問である。

このように、自然と人間との關係は、禪の哲學の第三部を構成すると共に、現代世界の焦眉の急をなす重大課題でもあるのである。野田又夫も「科學的世界觀乃至技術と人間の倫理的生の間の對立或いは矛盾を、近世世界の進展を促がす事態として肯定的にみるか、又は近世文化の致命的な惡と考えるか、これが常に吾々につきまとう問題である。その限り陳腐な問題である。しかし近世の思想はこの問題に對するきつぱりした態度決定を必ず含まねばならぬ。この點に對する誠實を欠く限り、近世を超越することなど思いもよらぬ。」<sup>(6)</sup>と云つてゐるのは誠に至言である。

自然は人間の文化に對立するものであり、その意味に於て人間否定的であり、宗教も亦人間否定の上に成立つものである。従つてここに、宗教と自然との共通點が人間否定の方向に見出されるのである。これが亦、人間と自然との關係である。

然し宗教は西洋に於ては一般に超自然と考えられて、自然に反するものとされている。ジョン・デユイも、「傳統的には、宗教というものは、超自然という觀念と密接に結びついて來たといえよう。」と云つてゐる。

この意味で、禪という宗教こそ自然的である。即ち禪は西洋の既成宗教の否定として自然主義である。従つてこの點で禪はデユイの宗教觀に反するものではないが、然し又、デユイの説くような人間主義の宗教をも否定するものである。禪は人間の否定を出發點としてゐるからである。禪は、人間に死んで自然に蘇ることを教える。道元が「自己を忘るる」といふは、萬法に證せらるるなり。」という所以である。

釋迦牟尼が暁天の明星を徹見して、「奇哉々々草木國土悉皆成佛」と讚歎し、カントが「それを考えること屢々にして且つ長ければ長いほど益々新にして且つ増大し來る感歎と崇敬とを以て心をみたすものが二つある。それはわが上なる星の輝く空とわが内なる道德法とである。」と驚嘆した所に、それぞれの大哲人の悟りと救いがあつたのである。又、ガリレイが、「それでも地球は動く」と抵抗し、パスカルが「空間によつて宇宙は私を包み、一點の如く私を呑みこんでしまふ。しかし思惟によつて私は宇宙をつつむ。」と述懐し、ルソーが、「自然に歸れ」と絶叫した所に、彼ら自身の眞理への悟りと人間文化への批判があつたのである。しかして彼ら独自の悟りの轉機に於て、すべて自然がその大きな契機をなしているのは誠に意義深いことである。

ラッセルがその著「宗教と科學」に於て、「宗教と科學との間には、長い闘争が續けられてきたが、この數年前までは科學が常に勝利を示していた。」というように、通常、自然を探求する自然科學と、神を求める宗教とは、古來より常に相剋相反の立場にあると考えられて來ているが、これは全くの謬見である。反て宗教こそ最も自然的であり、宗教を反自然のように考へている人々は、眞實の宗教を理解していない證左であるといわなくてはならない。従つて又、キリスト教の教説そのものに根本誤謬があるのである。

然らば、禪においては、自然と人間との関係はいかなるものとして現わされるであろうか。

諸行無常といわれるように、事物は常に變化し流動し、或は發展し或は退化するから、事物の関係も、事物の運動と共に變化する。従つて、關係というものも時間的歴史のものである。田邊 元は、「關係とはつまり歴史というものに歸着する。」<sup>(4)</sup>といつている。

故に、自然と人間との關係も歴史的に探求する必要がある。

歴史的に見て、これらの關係は次の五種に分別されうる。

- (1) 自然と人間とが相争う關係にありとなす自然觀——ラッセルの立場
- (2) 自然と人間とが對等に對立していると見る立場——デカルト
- (3) 自然が人間より下位に位すると考ふる立場——カント
- (4) 自然が人間より上位にありとなす立場——ルソー、デュウイ
- (5) 自然と人間とは連つていと觀る立場——ホワイトヘッド、ブートルー

これらの五種の關係の中、何れが正しい自然觀であろうか。しかして禪の自然觀はどのようなものであろうか。ひいては自然と人間との戰はいかに和解されるであろうか。

西歐の啓蒙時代に信奉された自然主義は、中世以來の超自然的、超越的傾向に對して、自然的、内在的見地をあくまで維持せんとするものであるが、禪の自然主義はその傾向を内に含みつつ更にそれをも越えて、その自然的内在的見地を更に否定するものである。即ち自然主義がよつて立つ所の人間中心主義の否定であり、近世ヒューマニズムの克服である。この意味で鈴木大拙が禪の立場を「新自然主義」<sup>(4)</sup>と呼ぶのは全く正しい。

西歐の自然主義が近世以來の科學的技術的自然的支配から實驗的論理のプラグマチズムを生み、更にそれがヒューマ

ニズムを擲取して社会主義の方向へ進むに對して、禪の自然主義は技術的自然支配よりもむしろ自然主義初期の藝術的自然觀照の方向を辿るものであるが、しかし、デカルトが考えたように人間の精神が身體を完全に離れた自然を觀照するのではなくして、即ち、自然を自己の外に見やるのではなくして、人間と自然との對立を超えて両者の否定の後の或物即ち自然法爾の自然に成るのである。この自然はドルバックの如き機械的自然でもなく、ディドロの生命的自然でもなく、ホワイトヘッドの有機的自然でもない。これは機械とか生命とかを更に否定するものであつてむしろルソーの自然ベルグソンの自然に近いものであるがしかしそのような神的自然ともいうことは出来ない。しいて云えば絶対的自然といふべきものである。現代における緊急課題即ち科學的自然と人間倫理との統一は、ラッセルの云う自然と人間との和解は、ベルグソンやホワイトヘッドによつてさえ不可能であつた。<sup>(34)</sup>此の大きな壁、アポリヤを破碎するためには人間の大きな決斷が要求される。即ち人間の絶対否定、大死一番がなくては此のアポリヤを越えることは出来ない。ここにおいて、禪的自然が唯一の活路として開かれるといへば、獨斷のそしりを受けるであらうか。

禪は人間の作爲、人間の文化を否定する。この意味でルソーの自然主義に近いと言えるが、然しルソーの如き倫理的人格の立場ではない。ルソーの言う「自然」とは、「凡ては造物主の手から出る時善であるが、人間の手に於て悉く墮落する。」<sup>(35)</sup>と云うように、自然の人間が善であると言ふ意味のものである。

禪の自然主義は、人間の鋭敏な智慧分別即ち人間理性の狡智、並びに人間の巧妙な術策即ち人間の有爲的な行爲等、カントの倫理もベルグソンの生命もプラグマチズムの行爲をも含めて一切の人間の文化を、人間の業としてすべて否定するのである。人間の絶対否定である。これが禪の自然主義の内容である。臨濟が、「僞諸方に言う、道に修あり證ありと。錯ること莫れ。設い修し得る者有るも、皆是れ生死の業なり。僞言う六度萬行齊しく修すと。我れ見るに皆是れ造業。」<sup>(36)</sup>という所以である。

道元が、「自己を忘るるといは、萬法に證せらるるなり。」と斷定せることこそ誠によく禪の自然主義を表明している。

このように、禪の自然主義を最も端的に提唱するのは、禪の五家七宗の中では曹洞の系統である。古來より曹洞の宗旨は綿密といわれ、又曹洞土民といわれ、或は又、心地を究むものと稱せられ、更に又、偏正回互が曹洞の特質であると説かれていたが、吾々はそれにも拘らず、敢て曹洞の特色を禪の自然主義として規定せんとするものである。

寶鏡三昧に、「汝不是渠、渠正是汝」と説き、道元が、「自己をはこびて萬法を修證するを迷とす。萬法すすみて自己を修證するは悟なり。」という點が曹洞宗の特色であるがこれらの言説こそ、最もよく禪の自然主義を標榜しているからである。

曹洞宗の元祖洞山の過水の偈は彼の省察徹底の偈であつて、従つてこの偈こそ最もよく曹洞宗の特質を表現していると言ふことが出来るものであるが、その偈にいわく、

切に忌む他に随つて覓むることを

迢々として我と疎なり。

我、今、獨り自ら往くも

處々に渠に逢ふことを得。

渠、今、正に是れ我

我、今、是れ渠ならず。

應に須らく與摩に會して

方に如々に契うを得べし。と。

洞山の此の大悟徹底の偈こそ最もよく禪の自然主義を誦出しているのである。

自然主義は通常、歴史主義の反對の立場であり、禪の自然主義もそれと同じく、人間の倫理、歴史、文化を否定するが然し、歴史や倫理が禪に於ては解決出来ないという意味ではない。

「世界史は自由の概念の發展以外の何物でもない。」とヘーゲルが言うように、歴史は自由の意識における進歩であると規定することが出来るが、歴史主義に於ては、人間の自由、創造を高く買うのである。然し自然の必然性の中にも必ず偶然性が内在する如く、歴史の自由性の中にも實際には必然性がひそんでいる。ヘーゲルが理性の狡智 *List der Vernunft* と名づける所以である。

人間の歴史的創造と雖も、實は創造ではなくして被造であり、自由ではなくして必然であり運命的である。佛教で業という所以である。吾々弱小なる人間は歴史的創造とは全く逆に、世界史の大きな流に何ら爲す所なく押し流されていくに過ぎない。

従つて、人間の歴史には眞の創造は成立し得ない。すべてが他動的、受動的である。

眞の創造は、眞の自由は、相對的人間の立場を超える所に現成する。禪の人間否定の上に於て眞の創造が實現する。これが眞實の歴史主義であり、禪のみが、これを吾々に惠與することが出来るのである。

ここに禪の歴史主義が成立つ。そしてこの立場を強調するのが、五家の中に於て、臨濟と雲門の二家である。古來、唐宋時代より今日に至るまで、禪の諸流の中に於て、臨濟と雲門の二宗が特に尊重される理由の一つは、人間の自由と創造の問題こそ禪の核心をなすと考えられるからであろう。

さて、六祖慧能が無念、無心を強調する如く、禪の傳統の本流を傳えている景德傳燈錄三十卷とそれに含まれている千七百則の公案は、畢竟するに、「無心に歸れ」の一語に盡きるのであると言ふことが出来る。ルソーが、「自然に

「歸れ」と絶叫する如く、禪の公案はすべて、「無心に歸れ」と説き示している。その「無心に歸る」とは天地自然のままに任せることであり、人間の巧智、奸策を除去して自然の花鳥風月に歸ることである。寒山が美しい自然風物の詩を數多く遺しているのは、自然の森羅萬象に托して人間の無心の境涯と無心の行爲とを誦出したものに外ならない。只没禪とか不生禪とか「そのまま禪」とかいうものは、すべてこのような禪の自然主義を示すものである。人間の自己を否定して大自然を自己とするのである。

洞山の過水の偈に言う所の「如々」とか、或は眞如、只没、「そのまま」という表現は、禪の自然主義を指摘する最も適切な言である。禪が理想主義でもなく又、神祕主義でもないことを端的に示している。「そのまま」の境地は、即ち洞山の從々兄、徳山の心境でもある。<sup>(33)</sup>「始めは芳草に随つて去り又落花を逐うて回る」「行いては到る水の窮る處、坐しては看る雲の起る時」等の有名の禪家の句は皆、禪の自然主義を十二分に描出している。南泉が「平常心是れ道」と喝破し、無門がその南泉の境涯を頌出して、

春に百花有り秋に月有り

夏に涼風有り冬に雪有り

若し閑事の心頭に拄ること無くんば

便ち是れ人間の好時節(34)

というのは、禪の自然主義を證明するに餘りありということが出来る。

「如々」「眞如」じゆじゆ 即ち「そのまま」ということは、人間の作爲性を絶対に否定することを意味する。即ち、人間の立場からは全く手の届かぬこと、手のつけ得ないことを示した言葉である。「如々」或は「眞如」とは、人間の立場で考ふる、或は行爲する所の、そのままを言つたものでは決してないのである。「そのまま」という表現には往々



誤解が生じ易い。鈴木大拙が、「そのまゝ禪は好い方といけない方との両面をもつてゐる。」という所以である。

然し、このように大拙が言うことは不適當であつて、そのまゝ禪に、いけない方がある筈はない。大拙は「そのまゝ禪のいけない方は任に相應する。」<sup>26)</sup>と云うが、任とは自然法爾ということであり、人間のはからいを捨てて絕對者に任すことであつて、任こそ好い方であるといわねばならない。そのまゝ禪の「そのまゝ」即ち任とは通常の吾々人間の言ふそのまゝではないからである。自己を忘れて萬法の證の上に立つそのまゝである。有限の人間の立場からは手のつけようのない所の任である。従つて、そのまゝ禪—只沒禪を觀照的であると言ふことも適當ではない。觀照ということは既に自他の對立があるから成立するのであつて、只沒—そのまゝには自と他の差別はない。天地自然の一枚のみである。他を觀照する自己としての人間は既に否定されつくしている。觀照的というすきまさえ存しないものである。(未完)

- 註(1) アリストテレス著「政治學」一二五二  
 (2) ラッセル著「原子時代に住みて」譯二〇頁  
 (3) 同右 二〇頁  
 (4) 同右 二一頁  
 (5) 同右 八頁  
 (6) 野田又夫著「啓蒙思想とヒューマニズム」五九頁  
 (7) John Dewey: A Common Faith, p. 1  
 (8) カント著「實踐理性批判」譯 二二六頁  
 (9) パスカル著「パンセ」三四八頁  
 (10) ラッセル著「宗教と科學」譯 一頁  
 (11) 田辺元著「一般的教養としての數學について」八五頁  
 (12) 鈴木大拙著「禪」四五七頁  
 (13) 野田又夫著「啓蒙思想とヒューマニズム」一〇三頁  
 (14) ルソー著「エミール」譯 第一卷 一頁  
 (15) 「臨濟錄」岩波文庫 五五頁  
 (16) 東嶺著「五家參詳要路門」  
 (17) 「碧岩錄」第四十三則評唱  
 (18) 「正法眼藏」岩波文庫 上卷 八三頁  
 (19) 「祖堂集」卷第五 一五頁  
 (20) ヘーゲル著「歴史哲學」譯 三三頁  
 (21) エミール・ブートルノー著「自然法則の偶然性」  
 (22) ヘーゲル著「歴史哲學」譯 五九頁  
 (23) 「無門關」第十三則  
 (24) 同右 第一九則 (25) 同右 同右 頌  
 (26) 鈴木大拙著「禪思想史研究第二」四二七頁  
 (27) 同右 (28) 同右 四三六頁